

中根東里研究計画書

1. 研究テーマ：万物と一物——中根東里の実心実学

2. 申告者：東北大学 文学部日本思想史分野 博士二年生 劉宇昊

3. 研究構想

(1) 研究内容

本研究は万物一体思想を東里思想の研究の核心として展開する。本研究は東里の万物一体概念を詳しく述べる上で、東里の万物一体論と朱子学、陽明学の万物一体論の区別を分析し、東里の思想自身の特色を発掘することを注目している。

現在の注目点の一つは、「一体」と「一物」という言葉の異同から検討する。「一体」と「一物」は全部東里の原文に由来している。『東里遺稿』と『東里外集』において、「一体」の出現の頻度は「一物」よりやや高い。

「一体」と「一物」は完全に同じ意味であるのか？朱子学の一体は体用の体であり、体は道理であり、一体の本質は一つの「理」であり、つまり一貫という意味である。しかし、東里の言った一体は実体であり、物体の体という意味である。東里の一体に対する理解は一物という意味にかなり近い。朱子学の言った一体と混淆することを避けるため、本研究がテーマを「万物と一体」ではなくて、「万物と一物」に決めることはこういう考えからである。

万物一体の思想のほかにも、東里の学問は多くの側面を持っている。『日本陽明学派之哲学』では、井上哲次郎が東里の言った「退屈の弊」を重要な論点としている。東里が「退屈の弊」と言ったのは、志を立て、自らの意志で貧賤、苦難に打ち勝つためである。これに対し、井上哲次郎氏は、東里の学問が自得の概念に進むのは、もっと狭隘ながらも、もっと精妙になったと考えている。しかし、東里の思想における「退屈の弊」の位置については、井上哲次郎はそれ以上深く解説していない。

「退屈」という言葉は実は仏教用語であり、紀元10世紀の『往生要集』において最初に見られるようである。『論語』、『孟子』、『伝習録』などの儒教の著作はこの言葉を使ったことがない。東里が儒学者として、この言葉を使って他人を教育するのはその思想の多様性を十分に示している。

「退屈」という言葉以外にも、東里に使われている「虚覚靈明」や「無始無終」などの言葉は、明らかに非儒教的な色彩を持っている。東里の還俗のきっかけである『孟子』の浩然之氣章は、神秘主義への宗教体験の要素がある。だから、東里の多様性用語に対する考察は本研究の重要な内容である。

東里の思想の多様性は彼の民間教化に対する関心にも表れている。東里学問の具体的実践に対する考察も本研究の注目点の一つである。「新瓦」には、数々の孝道を広める故実が使われている。「題婦女身觀世音図」は民俗を矯正するために作った。東里の郷民の教化に対する効果は、後世の評価から見える。

以上は東里学問の意義を考察したものである。東里学問が広く伝わっていない理由は、著書を好まなかった以外にも、彼の学問自体にも解決しがたい問題があるかもしれない。先行研究では、東里の学説に存在する問題の検討が不十分である。

管見によると、東里学問は次の二つの問題がある。一つは、東里が万物を「私」と見なすのは万物の私に対する意義の差別を無視していることである。これは儒教（とりわけ孟子）の差別の愛と乖離する傾向を示している。一方、東里の学問は万物の差異を無視して

極端に同化する可能性がある。東里の学説の問題に対する関心は、本研究のもう一つの特徴である。

(2) 論文の枠組み

1. 東里の経歴
2. 東里学説の主な内容
 - ①万物一体
 - ②一体と一物
 - ③朱子学、陽明学の万物一体理論との差異性
3. 東里学説の多様性
 - ①「退屈」などの非儒教用語に対する考察
 - ②東里の学問と民間教化
4. 東里学説の問題点
 - ①儒教の差別の愛に対する乖離
 - ②極端に同一化する傾向

(3) 難点と重点

本研究の難点は、中根東里の後世に伝わる文献が少ないことにある。東里は徂徠学派から室鳩巢の朱子学派に転向した際に、徂徠の勧誘を受けて書いた文章を全部焼き払った。晩年はかつての文章に不満で、また大部を焼き払った。今日残された文献は『東里遺稿』、『東里外集』に収録された十余編にすぎない。だから、残っている文献を通して、東里の思想の全貌を推測するのは難しい。特にその思想の多様性についての考察は、人物の経歴とお互いに検証してこそ、研究をもっと充実させることができる。

本研究の重点は東里思想自身の独特性を探究することにある。ある先行研究では、中根東里の学問は王陽明本人に比べてほとんど変化しておらず、江戸時代にもっとも王陽明本人の思想に近い学説であると考えられている。しかし、このような結論は完全に事実と一致するわけではない。前に述べたように、東里の学問は少なくとも、実物の角度から「一体」を理解し、非儒教の語彙を使って自身の理論体系を充実させるなど、様々な変化が表れている。したがって、東里学説の独特性を分析し、十八世紀陽明学の新しい変化を検討することは本研究の最も重要な任務である。

4. 研究意義

中根東里 (1694-1765)、名は若思であり、字は敬夫である。東里は江戸中期に佐野で活躍した思想家、陽明学者である。彼は一生名利を慕わず、官職もなく、ただ大衆に講義し、郷民を教化している。その生涯と著作は世人に知られていない。後世の柴野栗山は東里を「隠君子」と呼ばれている。中根東里は一生貧乏で、竹皮履を売って暮らしていた。世間では「皮履先生」と呼ばれている。このような隠逸な学者は、二十年余り郷民を教化していたため、佐野は「民風淳朴、敦于礼讓」という気風にさせられた。中根東里の思想は時空を超え、国別を超えるという張力を持っている。今日、中根東里の思想を再認識することは人間に向かう「無私」な関心という意味があるであろうと考えられる。

日本思想史の巨著丸山真男『日本政治思想史研究』は、朱子学の万物の一体性を、東アジア世界の近代科学の発展を阻害するマイナス要素と見なしている。万物一体論は長く批判されてきた。自然科学の分野における万物一体論がどのような役割を果たしてきたかは本研究が検討する範疇ではないが、万物一体論が道徳哲学の分野で大きな役割を果たし

たのは間違いない事実である。伝統的な儒教が解決したい問題は天人関係、人間関係、心身関係などの三つの関係の問題である。東里の独特な万物一体論は、この三つの主要な部分に触れている。今日に至るまで、この三つの関係は、儒教理論を使って理解されなくても、依然として現代人が直面する課題である。だから、道徳哲学が直面している課題から言えば、江戸時代と今日とであれ、日本と中国とであれ、大きな差別はない。東里が独特な万物一体論で以上の問題に対応するのは、今日でも相当な価値がある。これも今日の東里思想に対する再認識の意義である。

5. 中根東里の経歴：

中根東里の後世に伝える文献は少ないので、その思想内容は彼自身の経歴とお互いに検証して研究しなければならないと思う。だからここでまた東里の若い頃の経歴について詳しく説明する。

中根東里は幼いころに父を亡くし、母に親孝行をし、母の要望を従って入寺した。東里は華音が好きで、荻生徂徠が華音が上手であると聞いてから、江戸に徂徠を訪ねた。徂徠は東里に会って、東里が非凡な人材であると感じた。徂徠は、彼と仲良い寺の僧に東里が寺に寓居することを許してもらった。徂徠の指導のもと、東里は左伝、史記、漢書を読み始め、学問のレベルが大いに向上した。この間に、安藤東野、太宰春台と文章で拮抗していた（力比べをする）。ある日、東里が病気になり、孟子の浩然の気という章節を読んで、「道広大簡易如是、而何茫乎从浮囟氏之虚誕、以誤此生乎？」（道はこのように広大で簡易で、なぜ浮囟氏の虚誕に従って、人生を誤るか）と感嘆した。それから還俗の志が生まれた。その後、東里は故郷に帰り、母の許しを得て還俗する。徂徠は、東里の還俗することを聞く後、不機嫌になる。東里も徂徠学が少し好きではなくなる。東里は、書いた文章を全部火に入れて焼き払った。この時、室鳩巢は東里の賢能を聞き、彼に入門してもらいたいと思い、東里も室鳩巢の学問を慕って加賀に行き、室鳩巢を師事した。二年間勉強してから、帰る。その後、東里は『王陽明全書』を読み始めて、「知行合一」という言葉を読むと、急に厳粛な顔をして、「所謂孔門伝授之心法尽在此書矣」（いわゆる孔門が伝授した心法は全部この本の中にある）と言った。それから陽明学の学者になった。42歳で、弟子に迎えられ、佐野で講義していた。晩年は浦賀に住み、「大人歌」、「人説」を書いて、天地万物の一体の思想を提唱した。72歳で病没した。

以上の中根東里の生平に関する記述は「東里先生行状」に基づき、著者は中根東里の学生須藤温氏である。須藤温は東里の親伝弟子であり、二人の間には多くの手紙のやりとりがあるので、須藤温の記述はかなりの真実性と信頼性を持っている。東里は若い頃に禅宗→黄檗宗→古文辞学→朱子学→陽明学を遍歴しているが、その学問的な根源の違いが大きく、遊歴門派が多く、同時代の唯一の人であるかもしれない。勿論、東里の早期の遊学経歴は彼の後期思想の形成に大きな影響を与えている。東里は陽明学を信奉し、陽明学を思想の主体とするが、つい他の門派の思想的痕跡を表わした。「東里先生行状」の著者である須藤温は、中根東里後期の弟子であるために、東里の早期に各門派を周遊する動機、経歴、学問の成就についてよく知らないではないかもしれない。「行状」は、東里が学派を変えた際に対する叙述が往々にして不明瞭であり、東里の父の死の時間についても明らかに矛盾しているところがある。だから、東里の思想を再認識する以外に、東里の若い頃の経歴、心理状態の変化などの内容に対して整理して分析することは本研究の重要な内容になるべきである。

6. 参考文献

- 中根東里『東里遺稿』『東里外集』、『日本倫理彙編』第二冊、育成會、1902年。
- 須藤温「東里先生行状」『事実文編』第三冊、國書刊行會、1910年。
- 室鳩巢『浚新秘策』、『日本經濟叢書』、日本經濟叢書刊行會、1914年。
- 井上哲次郎『日本陽明學派之哲學』、富山房、1903年。
- 大川茂雄「中根東里の伝」、『国学院雜誌』1907年。
- 糸川信也『東里遺稿解』、知松庵跡宝竜寺、1974年。
- 湯淺泰雄『身体:東洋的身心論の試み』、創文社、1977年。
- 磯田道史『無私の日本人』、文藝春秋、2012年。
- 張崑将『德川日本「忠」「孝」概念的形与發展——以兵学与陽明学為中心』、国立台湾大学出版中心、2004年。
- 陳立勝『王陽明「萬物一體」論：從「身體」的立場看』、国立台湾大学出版中心、2005年。